

2. 主として文献調査による。

3. わが国の家政学の研究が、諸外国に比して、被服・調理に顕著な傾斜を示していることはすでに指摘せられているところである。

この、いわば変則的な展開が行なわれてきた原因としては日本の家族制度が女性の地位を認めず、家族の統制・家族関係の調整を家長たる男子の任務であるとし、女子の領域としては家庭内の料理・裁縫その他が与えられていたに過ぎなかったことが大きい。(徳川時代には子女の教育さえ主として父親の任務であった)

家族制度への批判——家庭の本質の探究は天皇制国家の下ではタブーであり、したがって、女高師・女子大等高等教育機関においてもその“高等”たる存在理由を、食物・被服の分野における自然科学的合理性に求めざるをえず、これが一つの伝統となって今日の日本的な家政学をつくり出したものと思われる。またこのような研究方向が家政学は自然科学を基礎とするという意識を生み家政学としての独自性を見失なったのではないかと思われる。

男女の同権を原則とする新憲法の発布により初めて家政学の自由な研究が始まったといつてよい。これらの発展が注目される。

E—31 日本の家政学の展開過程

美作短大 額田 清

1. 明治以降におけるわが国の家政学の発展の過程および将来の動向を探る。